



先日、総務省消防庁が「自動消火タバコ」の検討に乗り出した、という報道があった。火災関係者は「いよいよ日本でも始まったか」と思つ一方、タバコ関係者は神経を尖らす、という状況になっているようだ。今回は、この自動消火タバコとタバコによる火災被害について考えてみたい。

吸っている時の感覚や味は従来どおりで、しばらく吸わなければ消えてしまふ、という巻き紙を設計するのは、試行錯誤すれば何とかできよう。

タバコの値段はあまり変わらないのに火災被害が減る、ということから、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、オーストラリア、韓国などは、既

に規制又は規制に向けての検討が始まっている。最初に自動消火タバコの義務づけ(自動消火タバコ以外のタバコに対する販売規制)を行ったのは、アメリカのニューヨーク州で2003年のことだった。以後、同様の規制がアメリカ各州に急速に広まって、現在30以

上で行われるようになっており、カナダもこれにならっている。ヨーロッパでは、EUの欧州委員会が2008年8月に自動消火タバコ

の基準案を発表し、今年販売規制が始まる各国へ

だ。住宅火災による死者1023人の18.9%に当たる193人が、タバコを原因とする火災で亡くなっている。これは、第2位のストーブを原因とする火災による死者数(104人)の2倍近い値で、圧倒的に第1位だ。一方、住宅火災で亡くなった人のうち15.6%に当たる160人(これも圧倒的に第1位)は、最初に布団類に着火した

「自動消火タバコにどう向き合うのか」自動消火タバコに対する各国の動きとタバコ火災による以上のような被害を勘案した上で、日本としては、この問題にどう向き合うのか決めている。各国とも、防火関係者や環境保護関係者、禁煙運動関係者などは、自動消火タバコの義務化に熱心だが、タバコ製造関係者は消極的だと聞く。現に、アメリカでは、2005年に連邦議会に自動消火タバコを義務化する法案が提出されたが、生産者関連団体の反対で否決された。その後、自動消火タバコを推進する人たちは、国レベルの義務化を当面あきらめ、州ごとに法制化する方針に切り替えて実績を上げていく。規制を検討している他の国でも、多かれ少なかれ、事態は同様らしい。先進各国が、すんなり自動消火タバコの義務化に向かっ

て走り始めるのかどうか、予断を許さないところがある。報道によれば、日本のタバコ関係者も、消防庁の動きを複雑な気持ちで注視しているようだ。昨今の禁煙、嫌煙の広まりやタバコ税の値上げでタバコ離れが進んでいる時に、さらに追い打ちをかけた気持だろう。

自動消火タバコとタバコ火災

「自動消火タバコ」

「自動消火タバコ」とは聞き慣れない言葉かも知れないが、考え方は以前からあった。しばらく吸われないでいると自動的に消えてしまふタバコのことだ。英語ではfire safe cigaretteと言

う。火災安全タバコとか、防火安全タバコなども訳されている。消防庁では「低延焼性たばこ

」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

原理が単純で昔からありそうなのに、ようやく最近になって現実のものとなって来たのは、そんな紙を大量に生産し、一本のタバコにうまく巻いていくシステムを、大した費用をかけずに作れるようになったためだろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま

る」と表現している。健康への影響を考えれば当然だろう。

「先進国では規制が始ま